

順正寺報 第二五号

『彼岸会』御案内

当山「順正寺」では、壇信徒の総霊位をまつり、仏恩報謝の念いをこめて、左記の通り「春季彼岸会法要」を厳修致します。

公私共御多忙とは存じますが、万障繰合せの上御参詣下さいます様、お願い致します。

記

二月二十二日（土）

「結願の日」

午後一時より

法説経 法話 おとぎ

以上

◎御自宅で読経を御希望の方はお電話下さい。

彼岸入り 三月 十七日（日）

お中日 三月 二十日（水）春分の日

結願 三月二十三日（土）

◎寺へ御遺骨をお預けの方は、お彼岸の期間中に必ずお参り下さい。

尚、十七日（日）・二十日（春分の日）にお参り頂ければ、読経供養致します。 住職

◆『彼岸』の意義について。

「彼岸」とは、日本固有の風習であります。この風習は、古来より伝わり、今日まで生き続けてきたものであり、本来は「至彼岸」のこと、つまり、「彼の岸に至る」ことを言います。ここでいう「彼の岸」とは、極楽浄土・彌陀世界のことであり、そこまで辿り着くことをいうわけですが、ただし、そこまでは、難渡海（渡り難き海）があり、自力にて辿り着けるものではなく、その海を越え、全ての者を岸まで導くのが「彌陀の本願」なのです。例えれば、「彌陀の本願」とは、「難渡海を渡る大船」といえるものです。ゆえに、彼岸とは亡き人の徳をしのびつつ、その誘いにより「彼の岸」を慕い、彌陀の大船に乗じて救われていかんと発心する場であります。「彼岸」に至るまで、末法濁世に生きる我々には多くの苦しみが有ります。その世の中で生をまっとうしていくことを願っているのが、仏様であり、阿彌陀様であります。そこに、真に気付いていく機会として、「彼岸」という一つの風習が今日まで根付いてきたのであります。

幼稚園日記 (第一回)

副住職 江口 貫正

いろんなところに、いろんなものが転がっているもので：と、言っても、別に落とし物を拾い歩いているわけじゃありません。私が道楽で演劇をやっていることは御存じの事と思いますが、まっ、それが縁で幼稚園の卒園フェスティバルの演出をする事となりました。幼稚園のフェスティバルと云って、並のお遊戯会じゃありませんぜ。ミュージカルです、ミュージカル。そう、『唄って踊ってランランラン』という奴です。思い起こせば：10月4日。朝から背筋に寒気がする。今日は三年後に行われる『蓮如上人五百回忌法要』に向けての伝達講習会である。

(伝達講習会が何であるかは、この際関係ないので説明しない) 寒気がして、当然といえば当然である。だから、頭を三回振って寒気を追い出し、苦痛な八時間を過ごしに真宗会館へ向かう。

午前中の講義が終り、休憩所でタバコを吸っている。

「いやあ、今度クラブトン取れたんですよ」加藤君

が嬉しそうに話しかけてくる。加藤君は、真宗会館(真宗大谷派の東京出張所)の教導である。彼はいつもハイテンションだ。私は多少気後れを感じながらも相槌を打つ。そう、私は大人なのだ。タバコ吸いの、茶飲みもの、していると、何時の間にか演劇の話になる。加藤君はかつて会館報恩講で、一緒に『蓮如』の芝居を創った。

「加藤君さあ、忙しいかもしれないけれど、今度、台本書いてみなよ」

「そうですねエ、実は僕もちょっと・・・」そんな風に話はダラダラと続くが、目の前には、どういう訳か会議室で私の右横に座っていたヒゲの男がいる。口ヒゲだらけである。年齢は、良く分からない。「実は本保もとやすさんのところでも子供達が芝居やっているんですよ。去年、僕観たんですけれど、ミュージカル、凄いですよ子供達。幼稚園生がここまでできるのか。ほんまに、園児がって。ほんと、ぶつとびました」

加藤君はハイテンションで喋る。テンションが上がれば上がるほど、彼の発音は不明となり文脈も乱

れる。でも言いたい事は伝わってくる。とてもいい奴だ。さて、どうやらこの口ヒゲの男は、幼稚園をやっているらしい。別に我々の業界では珍しいことではない。住職兼園長はいっぱいいる。

「実はね、こちらの江口さん、芝居やってるんですよ」と、加藤君が紹介する。

「あっ、私、江口といいます」

「本保です」

腰の低い男である。また、坊主臭くない。

「実は、毎年うちの幼稚園で、卒園フェスティバルという形で、年長組の子供で、芝居をやっているんです」

「へえー」

「ただそのお、生意気な様ですが、それは一般的な、お遊戯発表会みたいなものにはしたくないと。観客が本当に観られる物を造ろうという事でやっているんです」

「そう。でも、子供相手じゃ大変でしょ」

「あっそうだ、本保さん、江口さんにやってもらったらどうです、演出」

「ゲッ」

「……」

この時本保君は微笑んでいたが、眼がキラリと光ったのを私は見た。しかしその時は気のせいだと思ったのだ。それにつけても加藤君はいい加減な奴だ。自分のいったことにとっても満足しながら、私に笑い掛ける。

「ハハハハ。でも俺は子供相手に芝居造ったことも、遊んだこともねえからな。想像越えてるよ。」
何とか逃げ道を作ろうと試みる。

「うん、そりゃいい、本保さん、江口さんに頼みなようん」

加藤テメエ、俺の話聞いてろ！

「是非、お手伝い頂ければ……」
口ヒゲが微笑みながら私に言う。

「と・とにかく、想像絶しているし、俺、考えてみるから」

「あっそうだ、一度ビデオ観たらいいですよ。ウン、確か去年のビデオありましたよね。それいいうん。」

加藤、いちいち自分の言うことにうなづくな。

「その、なんだ、とりあえず、手伝いぐらいなら出来るかもしれないけど……」
よし、これで逃げよう。

「それじゃ一度いらして、いや、こちらから一度伺って、詳しい事お話ししてもいいですか？」

上げた腰が中途半端に泳いでいる。私はもう頭の中は真っ白だ。「そうか、これが朝からの悪寒の原因だったのか」遠くでもう一人の私がうなだれている。

月日は流れ、十二月。ミュージカル。子供の総数80人。大きなホール。等。どう考えてもやらないほうが良いと思う心は、好奇心に負けてしまって、引き受けてしまっていた。今日は初稽古である。一週間ぐらい前から眠れない。何をどうすればどうなるのか。考えれば考える程、頭の中は混乱する。その上、三日前には最悪の条件を思い付いてしまった。それは混乱しつつも台本とにらめっこしているときにフと「あいつらこれ読めるのか？」そう、台本は普通の台本だ。我々が普通に使う台本だから漢字もいっぱいある。「子供用の台本があるのか？」

またそこで、十一月のある日のことを思い出す。十一月の中頃に、幼稚園児とは、いったい、いかな者達か？観察すべく私は出掛けた。

「おじさん誰？」

「なにしてるの？」

おじさんではない。お兄さんだと心の中で思いつつも、こいつらのパパはおれより年下かもしれないという事実には愕然とする。そのうち、何の害もないオヤジと正体が判ると、ガキ共は甘い物に群がるアリののようにワツと集まってくる。そして俺の服、持ち物、髪の毛、全て引っ張りグシャグシャにする。子供達の様子をメモしていると、

「ちょっとそれ貸して」

あつというまにノートとペンを奪い取られてしまう。そしてノートには模様が記される。

「なに書いてんだよ」

「オレの名前」

どうやら、「さとし」と書いたらしい。一人が書くのと次から次へと皆でサインしてくれた。解読可能なものは殆ど無い。こんな奴等に台本は読めねえよな。

♪そして僕は途方に暮れる。♪

さて、眠いながらも、頭マツ白に成りながらも初日である。ここまですればまな板の上のコイ。どうにでもなれとばかり、とにかくガッツだぜとはりきる。先生達も大変である。私は、普段、一人で仕事をしているせいか、人に指図をすることが上手ではない。子供のことは先生が一番良く解っているのだから、あぁして、こうして、こういう風に造りますと。で、私は出来栄えをチェックすれば良いのだが、頭じゃ解っていてもそれができない。それで、一人で汗かいて大声出して、走り回る。先生達は、手伝ってくれようとするが、私の意図がまだ見えないために困っている。「まずい。なんとかしなければ」でも、なんとかする前に終了の時間となってしまうのであった。幸いだったのは、子供達は、とても飲み込みが早いという事である。そして二日後、私は、又、重い足を引き摺り、ラッシュの電車で横浜に向かう。思ったより練習の成果が上がらない。予定通りには絶対にいかないと知っていても、大体、予定なんて作れる筈はないのだけれども、一応タイム・

リミットがある為に考えないわけにはいかないのである。それにつけても、ガキ共は元気だ。

練習も二週目、どうしたものかと台本を読みながら東横線に揺られている。

ちなみに、私は東横線が嫌いだ。何が東急だ。東京急行？どこが急行やねん。一つと跳ばししかしない電車を急行と呼ぶ、あの無神経なところが嫌いだ。それはさておき、幼稚園に着くと、子供達はとても元気だ。

「えっ、どうしたんだ。」

私は目を疑う。前回の練習ではなかなか出来なかった事が、今日はとても良い。何があったのか。

「昨日は、頑張りましたから。」

笑いながら副園長が言う。

ここでもまたまた余談となるが、子供達はとても鋭い。彼等は誰の言う事を聞かなければならないのか良く知っている。若い担任の先生の言うことはなかなか聞かないが、年期の入った先生方の一言にはピシッと従う。何て奴等だろう。ちなみにこの頃の私は、顔面中ヒゲだらけで、とても人相が悪かったの

で、子供達は一応言うことを聞いていた。

練習が進むにつれ、私はどんどん落ち込んでいく。もうじき冬休みに入ってしまうというのに、未だに全体が見えてこない。スケジュールはそれなりにこなしているのだが、この先の展開がまったく湧いてこない。

先程は『東急電車』が嫌いだと書いたが、この頃にはとても助かってきていた。8時15分発の桜木町行は確実に座れる。そして、約45分間集中して考えることができる。乗り物に乗ると物が考えやすくなるのは、私だけだろうか。

先生達も煮詰まってきたようだ。今回、私は演出という事で、制作には全くタッチしていない。これはとても楽チンなのだ。芝居やるときには、この、『制作』ほど厄介なものはない。金集め。人集め。進行。幾ら時間があっても足りない仕事である。

「すみません。衣装造ってくれるお母さんののが足りなくて、今日はまだ衣装着けられません。」

「この照明なんです、実は予算の問題で、もしかしたら借りられないかもしれないんですが。」

「いや、それ、何とかします。」

「クミちゃんのお母さんが、子供出さないって……とにかく大変なのだ。でも、私のところにはそういう事を言っていない。それぞれの持ち場を皆心得ている。そういう、ぬるま湯のような環境で、私はすっかり弱気になってしまっている。情けないなあ」と思いつつ今日も練習を観る。子供達はそういう大人の思惑とは関係なく、とても元気である。自分達が芝居を造っていることが、皆、解ってきたようだ。

「あっ、えぐち来たの。」

「おう、おはよう。」

「江口、来ない時いつもデートしてるのか。」

「そうだよ、当たり前じゃん。」

「エーッ」

「おまえらデートしないのか」

「しねえよ」

こいつらデート知ってるのか。とにかく近頃のガキはませている。

「昨日ね、凄く練習したから観ててね。」

「そうか、よし。」

練習が始まると、さっきの春奈が

「観ててね。」

念を押す。春奈は時々気が散るが、とにかく前に出るのが好きだ。立ち位置を舞台の後方にしても、暫くすると前に出てきている。

「やる前から出来ないと言うな。父さん、いつも言うところぞ。」

ヨシヒサが間違えた。皆が笑った。芝居は進む。ヨシヒサが泣きながら踊っている。チビのくせに間違えたのが悔しいのだ。

「親分、誰が一番上手？」

サトシが聞きにくる。

「そうだな、サトシかな？」

この段階で台詞があるのはさとしだけだった。

「……………」

キヨミちゃんの台詞が出ない。とても恥ずかしがり屋なのか、一言台詞を言うとき口を両手で押さえ、真っ赤になってしまう。

気分によってか、日によって子供達と旨く合う日と合わない日がある。合わない日は、初っぱなから

子供達に気後れしている。そんな日は人並みに落ち込みながら帰るのだった。

十二月も終りに近づくと、原因が解ってくる。子供達は体温が高いのだ。僕らオヤジは何をやるにも、ある程度ウォーミングアップをして、体を暖めてやらないと力が出ないが、奴等はいきなりなのだ。これに乗り遅れると、もう、着いて行けないのである。結果、練習前に子供達と遊ぶことにした。幼稚園の中では年長組という事で大きい子扱いされているわけだが、やはりそこは五歳児である。ダッコして、オンブして、と、一人をオブレれば、後は、ワツと群がり、両足に三人づつ、腕に二人づつと、まるで昔の囚人のように、手枷、足枷で歩かされる。

「ねえ、早く歩いて。」

「いてえな。上に乗るなよ。」

「だって」

「オレが先だぞ」

「先生、メガネちょうだい。」

「あたしのほうが先だもん。」

「ワツ、首を締めるな。」

ワーワー、ギャーギャーと騒いでいる。困った事に遊び出すと私はすっかり時間を忘れてしまう。

フと気が付くと、先生達が困った顔をしてこっちを見ている。本保君と目が合う。

「江口さん、そろそろ良いですか？」

「すっ、すまん。」

本保君は、私との涉外担当なのだ。外の先生方は遠慮して、私に直接言わないので、彼が全て、やな役をかつている。心から申し訳なく思う。でも、これでガキ供と、同じテンションでガンガンいけるのだから、仕方がないのであった。

（以下次号）
第一回了

注・紙面の都合上、今号では、ここまでしか乗せることができませんでした。

ここにお詫び致します。と、同時に次号の続きを楽しみに御待ち頂きたく思っております。

次の原稿の心配をせずに済み

一人、喜んでいいる編集人 合掌

『白色白光の会』の△△御案内
四月の『白色白光の会』は、左記の通り執り行ないます。

◎日時・四月八日(月)午後一時

◎△△△△・順正寺本堂

会では常時会員を募集しています。皆で語り合い、学び合っていていく楽しい会です。

詳しいことは当寺までお問い合わせ下さい。

生老若必滅(しようじやひつめつ)

減るところか、増え続けていく、いじめ、差別、自殺、殺し、戦争。時代が積み重なってきて、そのツケがどんどん回ってきている。経済大国となるために何よりも資本主義というものが重んじられてきた。何もそれを完全否定しているのではない。そうして現在、日本という国もそれなりに暮らしたりやすくなったことは事実として認めなければならぬ。又、現実にならなければならぬ時代であった。これも事実だ。その結果、命より金という価値観が生まれ、次第に、口で言うわりには命の重みを感じなくなってしまう。現在の現に今ここで生きていく私だ。死んでしまいたい？安心しろ。何年先か、何十年先かは知らないが誰でも、ほっといても必ず死ぬ時がくる。だから、それまで生き続ける。一人一人がそうすることが、次の時代に命の重みを伝える事ができる唯一の手段のように思う。自分の命の重さを感じ、その姿を見せる事で次の時代ができていく。

☎ 1777 東京都練馬区石神井町3の17の4

電話 03 (39996) 2064

FAX 03 (39997) 8117

順正寺